

## DGAKI-JSA 2019 報告①

佐賀大学医学部分子生命科学講座  
出原賢治

昨年11月29日と30日の2日間ドイツフランクフルト近郊で、第1回のDGAKI(ドイツアレルギー・臨床免疫学会)-JSA Joint Meetingが開催され、参加して参りました。その様子を御報告したいと思います。

まず、この会の開催に到るまでの経緯を御紹介したいと思います。一昨年幕張で開催された第67回JSA学術大会の際に、招聘演者のお一人であり、DGAKIの前理事長であるHarald Renz教授(Philipps-University Marburg)より、DGAKIとJSAによるJoint Meeting開催の御提案をいただきました。その後1年半かけて国際交流委員会、ならびに理事会で検討を行い、DGAKIと交渉を重ねた上で、今回の開催に到りました。当初はお互い数名程度の規

模での開催を検討しておりましたが、基礎から臨床までのアレルギーに関する全般の領域を広くカバーした内容において、DGAKIとJSAの両方から発表を行うことになりました。JSAからは私を含めて6名の演者、DGAKIからは10名の演者、それに加えて少数の聴衆とで参加メンバーが構成されました。JSAからの演者の内3名は若手研究者にて構成いたしました。2日間の限られた時間の中で、会場内では発表演題に関して、そして会場外ではお互いの学会の状況や学会間での連携の可能性について、非常に濃厚で、白熱した討論を交わしました。JSAから御参加いただいた他の5名の方の御報告により、その様子がお分かりになれるかと思えます。

DGAKIは会員数が1200名ほどのJSAに比べれば小さな学会であり、EAACI(ヨーロッパアレルギー・臨床免疫学会)の一構成メンバーです。しかし、学会誌であるAllergo Journal International(Allergology Internationalと非常によく似た名前です)や独自のガイドラインを発行しており、また、世界的に著名なアレルギー研究者を抱えて、非常に高い学術レベルを誇っています。これまでも留学、共同研究、学会・論文発表などを通してDGAKIとJSAに所属する個々の研究者レベルでの交流はありましたが、学会同士での公式な交流は初めてであり、そこに今回の会の開催における大きな意義があるかと思っております。

第2回のDGAKI-JSA Joint Meetingが今年日本で開催されることが決定されています。それ以降、あるいはそれ以外の交流についてはこれから両者で検討していくことになるかと思えます。この交流が、単にそれぞれの研究者の研究成果を発表する場で終わるのではなく、お互いの学会の学術的側面を発展させる機会となることが重要であり、そうなるように学会として取り組んでいきたいと考えております。そのためにも、会員の皆様のお知恵やお力を今後お借りしたいと思っております。どうぞよろしく御協力の程をお願い申し上げます。